

計量国語学会 第六十七回大会

予稿集

2023年9月23日
於早稲田大学

日本語の否定過去丁寧形における方言間のバリエーション

山田 彬堯 (大阪大学)

1. イントロダクション

本研究は、日本語の方言における否定過去形を取る丁寧語構文のバリエーションに関する記述研究である。¹2010 年代以降に、バスク語、韓国語、パンジャブ語、タミル語、マギ語、タイ語などの理論研究が著しく進展したことで、丁寧語の個別言語間変異についての理解が深まりつつあり (Miyagawa 2012; Portner et al. 2019; Kaur and Yamada 2022)、日本語の丁寧語にのみ見られる特異性も指摘されるようになってきた (Yamada to appear)。その一つが、否定過去形における“二重化”である。(1)がその例であり、どのようなメカニズムでこの二重化が生じるのかという理論的考察が論じられ始めている (Yamada 2019b, 2023; Miyagawa 2022)。

(1) a. 現在形：私は、走りませ ン。(I do not run の意味で)

b. 過去形：私は、走りませ ン * (でした)。(I did not run の意味で)

だが、この“二重化”という日本語 (標準語) の特異な性質は、なにも外国語との比較においてのみ浮かび上がってくるわけではない。(1)b とは異なり、“二重化”しない丁寧語構文も、日本語の方言には存在しているためである。しかし、このような日本語という個別言語の内部における言語内変異に関する詳しい調査はこれまでの研究では実施されてこなかった。そこで、本研究では、クラウドソーシングを用いた大規模オンライン言語調査で得られたデータを用いて、(2)に記すリサーチクエスチョンに対し、(3)に示す答えを与えていく。

(2) 本研究の問い：方言における非二重化否定過去丁寧形にはどのような使用傾向があるのか

(3) 結論：文 (節) 末に丁寧語が発音される傾向が見られる

2. 先行研究：通時的な視点

(1)a から、日本語 (標準語) は、現在形であれば「ます」だけを発音すれば、丁寧な意味が表出できることが分かる。しかし、(1)b からは、過去形になると「ます」に加え「です」を発音しなければ正しい文にはならないという制約が日本語に存在していることが分かる。このため、丁寧さを表すという目的だけを考えれば「ます」の存在だけで充分であるにもかかわらず、なぜ「です」も追加して発音しなければ文が正文にならないのか、というリサーチクエスチョンが大きな関心ごととして議論されてきた (Yamada 2019b, 2023; Miyagawa 2022)。一方で、

¹ 本研究は、2022 年度基盤研究 (C)「コーパス言語学と実験言語学の統合：敬語の確率的構文交替を事例に (代表：山田彬 堯)」(課題番号 22K00507) の助成を受けた研究成果の一部である。

中には、言語表現の正否は慣習的なものなので「(1)b に『です』が必要なのはたまたまだ」とし、合理的な理由など見つけられないだろうという（悲観的な）立場を取る研究者もいるかもしれない。ただし、すべてを慣習的だと考えることは、下記に示す示唆的な通時的観察を踏まえると、幾分か拙速な結論のようにも思われる。

第一は、“二重化”構文が登場し始めた黎明期である（明治期）に、(1)b だけでなく(4)に示すような“二重化”を引き起こさない事例が存在していた、という点である（Yamada 2019b）。

「です」を用いる以外に非丁寧形態素も使うことが可能であった以上、なぜ競合する表現の中で（よりもよって一番冗長であるとも感じられる）「です」を用いる表現が生き残り、他のバリエーションが絶滅したのか、ということについては、「たまたまだ」という仮説では簡単には片付けられないであろう。とりわけ、非丁寧形では「走らなかつた」と「かつ（た）」が使用されている点を踏まえると、(4)a を差し置いて(1)b が使用されるという点は重要である。

(4) a. 私は、走りませ ンかつた。 b. 私は、走りませ ンだつた。

第二は、「ます+です」というパラダイムが成立する以前の時代の日本語においても、“二重化現象”は生じていたという点である。下記の文を見られたい。

(5) こなたには、なにをもしりまいらせられ 候は す 候（1486, 雑々文書 [東山御文庫] :

引用元『東京大学史料編纂所研究成果報告「目録学の構築と古典学の再生」』2009年）
用いられている形態素自体こそ当時と現代で異なりはするものの、「丁寧語+否定辞+丁寧語」という形態素の並びが観察される点で、この構文は(4)と同様に“二重化”構文である。このようなデータを踏まえると、“二重化現象”を現代日本語のみに成立した特殊な偶然と解釈をするよりも、日本語の歴史の中で繰り返されてきたそれなりの必然性を帯びた現象なのだという捉える立場を（少なくとも一度は）検証する必要性がある。

とはいえ、「(1)b に『です』が必要なのはたまたまだ」という見方にも一定の理はある。(4)のように「です」を伴わない構文も存在はしていたためである。以上の点を踏まえると、我々は、この“二重化”に対してある程度の偶然性や慣習性の存在を認め、それはせいぜいが「そうになってしまう“傾向”のようなもの」として捉える必要がある。だが、また同時に、100%のルールではないとはいえ、なぜ“傾向”が生じてしまうのか、という点についても、考察を進めていく必要である。

このような“二重化”の傾向を議論していくためには、しかしながら、その前段階としても少し詳しく「どの程度“二重化”しない(4)のような構文が使用されるのか」という点を調査する必要がある。とりわけ、先行研究で日本語の通時的な変化（変異）が主に議論されてきたことを踏まえると、共時的な変異、すなわち、現代日本語の諸方言におけるバリエーションに関する調査は欠かせない。そこで、本研究は第3節に示す方法で調査を行い、その結果を第4節以下で論じていく。

3. データ

3.1 参加者

本研究では、クラウドソーシングを用い、47 都道府県の諸方言についてオンラインでの言語調査を実施した。今回利用したクラウドソーシング会社はクラウドワークス社である。各都道府県の方言の調査として、各調査に 10 名、47 回の募集を行い、どの都道府県からもバランスよく参加者が得られるように調査はデザインされた。²報酬は、各参加者 110 円とし、ここからクラウドソーシング会社の手数料が差し引かれた額が参加者には支払われている。実施期間は 2023 年 6 月 7 日から 24 日までの 14 日間である。本研究では、次の基準で不誠実な回答をしていると判断された参加者を取り除き分析を行う。第一は、指定された数字を押すように指示されたダミーのフィラーの文（計 11 個）において、一つでも回答ミスをした者である。第二は、異なる方言の調査に何度も参加した者である。第三は、特定の地域にしか話されていないはずのダミーの質問文（練習問題）に対して、その地域（やその近隣）ではないのに高い容認度判断を出した者である。報酬目的で実験内容を詳しく読まずに参加した悪質なワーカーであると推察されるためである。

3.2 呈示

本調査では、参加者に対し「コンセント ⇒ 背景情報収集 ⇒ 回答の仕方の説明 ⇒ 練習 ⇒ 注意事項 ⇒ 本番（刺激文提示）」という順番で刺激を提示した。方言は標準語とは異なり、そもそもフォーマルな場面では使用しにくい。このため、実験に先立ち、参加者には必ずしも日常的な知人と話す場面だけでなく、多少なりともフォーマルな場面に置かれたときに言ってしまうかもしれない（聞くことがあるかもしれない）表現についても意識して回答をするように注意喚起を促した。

3.3 刺激文

丁寧語形態素が登場する位置には（句周辺や省略文などの周辺の事例を除けば）大きく三つのものが存在する（Yamada 2019b; Miyagawa 2022; Yamada 2023; 山田 2023）。第一の位置は、否定辞の直前であり、便宜上この位置に生起する丁寧形を「タイプ 1」の用法と呼ぶこととする（= (6)）。第二の位置は、否定辞の直後に置かれるパターンで、これを「タイプ 2」と称する（= (7)）。(6)および(7)が、標準語において、規範形とされるバリエーションに生じる位置であるが、これに代わる新規形式として(8)に見るように文（節）の末尾に置かれる「です」が

² ただし人口／登録者が少ないためか 10 名分集まらなかった県がある（香川県 [5 件]、秋田県 [6 件]、石川県 [7 件]、福島県 [7 件]、岩手県 [9 件]、山梨県 [9 件]、島根県 [9 件]）。数の少なかった香川県と秋田県と、データに不備の合った鹿児島県、スクリーニングの結果 4 件しか残らなかった佐賀／宮崎県については二次募集を行った（6 月 25 日～7 月 9 日）。

あり、これを「タイプ3」の用法と呼ぶこととする (Yamada, 2019a)。

- (6) 走り ませ ん (ない) でした
↑ {φ/ませ/まへ}
- (7) 走り ませ ん (ない) でし た
{φ/かつ/だっ/やっ/じゃっ/でし} ↑
- (8) 走ら な (ん) かつ た です
↑ {φ/ませ/まへ}

それぞれの位置に他にどのような形態素が使われえるかは、各例文の下の中括弧内に示している。さらに、否定辞の形式も「ん」および「ない」(とその異形態)の二種類があることから、これらのスロットに来る要素が出現する可能性は $3 \times 6 \times 2 \times 2 = 72$ 通りあり、これらの組み合わせを全て各参加者に見せ、その容認度判断を5段階のリッカート尺度で収集した。平均は外れ値の影響を強く受けるため、各都道府県における平均的な回答を作成するため、同一都道府県への回答者の中央値をその都道府県の回答と見なした。サイズが 47×72 の回答行列に基づいてヒートマップを作製したものが図1である。行については、分析のしやすさを考え、主に地理的な区分に従って並べ、列については、ユークリッド距離に基づくワード法を用いた凝集的クラスタ分析を行った結果を反映し、並べ替えている(作図はR version 4.1.2におけるheatmap関数を用いて行った)。

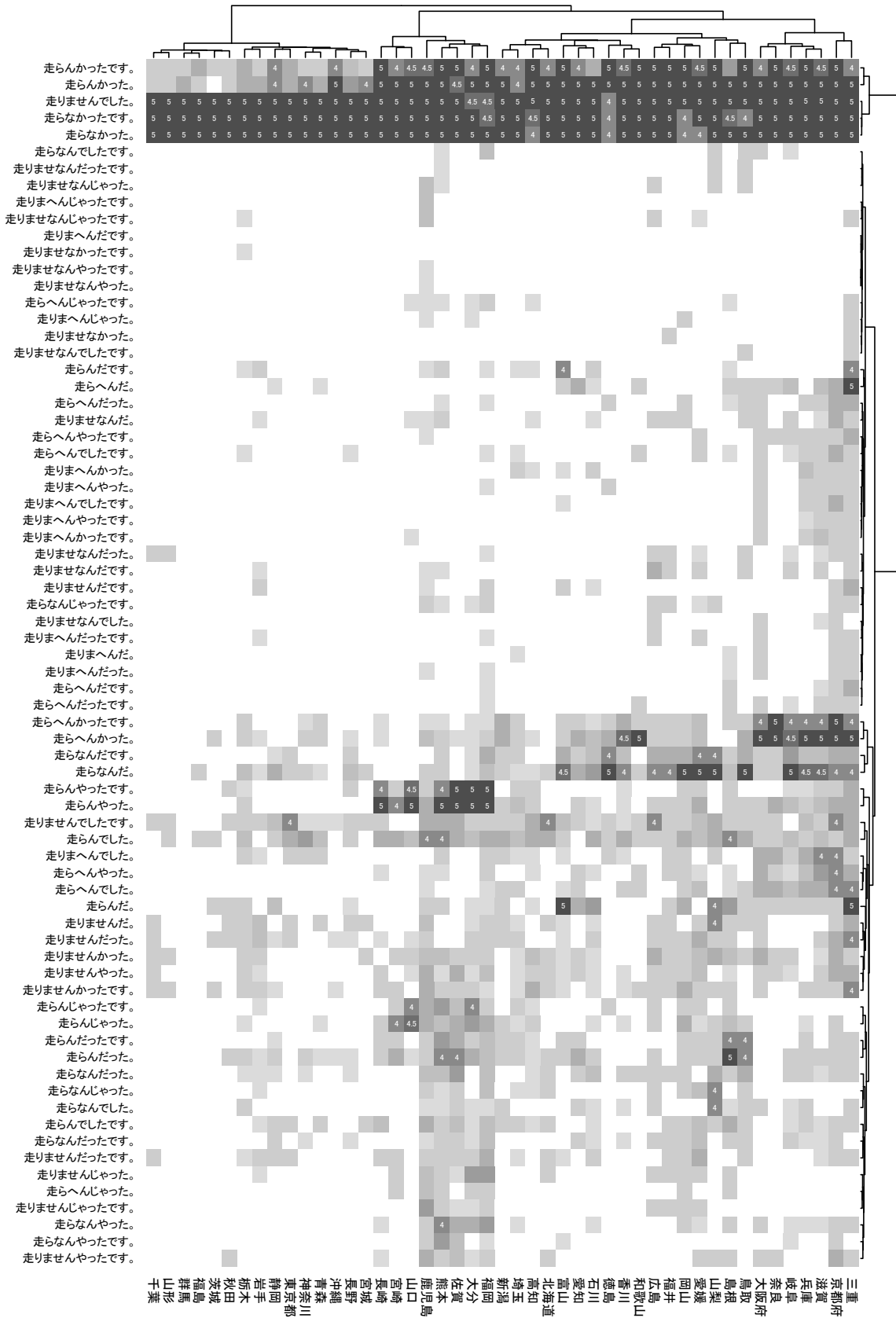
4. 結果

図1では色が濃いほどその都道府県の中央値が高かったことを示しており、最も黒いマスは中央値が5段階評価で5、色が白いマスは1であったことを示している。4以上の値を持つマスは数値でもその値を記入した。黒/白のところはその都道府県の方言話者の判断が一貫していると見なすことができ、解釈上最も参考になる。それ以外の部分は、個人または都道府県の内部での揺れが強い可能性があり、紙幅の都合から、本研究では積極的に解釈を施していくことは控える。明確に分かる傾向を探っていくと以下のようなになる。

4.1 全国的に使われている表現

全国的に容認度が高かった表現について次の二点が指摘できる。第一に、「走らなかった」「走りませんでした」「走らなかったです(タイプ3)」が、地域に関係なく使われる。ここから、各方言においても標準語の影響が強く存在することが窺える(言語学の研究者の視点に立てば「方言」として捉えることに不自然さを感じるころではあるが、実験の参加者の立場からすると「普段自分が行ってしまう言葉」という点で切り分けが難しかったものと考えられる)。

第二に、沖縄、東北～関東にかけてはその他の地域と比べやや容認度が下がるものの「走らんかった(非丁寧形)」とタイプ3の丁寧語である「走らんかったです(タイプ3)」について、多くの地域の話者が自然であるという判断を下している。



4.2 一部地域で使われている表現

まず、地理的に連続する都道府県の件にまたがって複数「5」が分布したものについて述べる。第一に、山口県から九州地方にかけて容認度が高かった表現には「走らんやった (非丁寧形)」とその丁寧形である「走らんやったです (タイプ3)」がある。第二に、近畿地方を中心に「走らへんかった (非丁寧形)」とその丁寧形である「走らへんかったです (丁寧形)」の評価が高い。第三に、「走らなんだ」は、中部～中国・四国地方の一部で容認度が高いものの、その丁寧形として想定される「走りませ なんだ (タイプ1)」「走らな ンでした (タイプ2)」「走らな ン だ ず (タイプ3)」等については、そこまで強く使用傾向が読み取れるわけではない (しいて言うなら、この三者の中ではタイプ3がやや容認度が高い傾向にある)。

次に、「5」が一部の県、あるいは、地理的に離れた県に散発的に登場したケースについて述べる。このようなケースには「走らへんだ (三重)」、「走らんだった (島根)」、「走らんだ (三重、富山)」がある。このうち、「走らんだった」については、そのタイプ3の丁寧形である「走らんだ ず だ ず」を含め、近隣の鳥取県でもやや容認度が高いことから、山陰地方の局所的な特色と見なせるかもしれない。

5. 議論

丁寧語が二重化をしない構文の可能性には、(9)の可能性が考えられるが、実際に安定的に複数の都道府県にまたがって使用されている表現は丸のついたこのごく少数に限られた。すなわち、「走らな ン だ ず (全国規模)」「走ら ン だ ず (全国規模)」「走りまへ ン だ ず (近畿地方中心)」「走らん だ ず (九州地方中心)」である。

- (9) a. タイプ1: 走りませ {な/ん} {かつ/だつ/じゃつ/やつ} た。
走りまへ ン {かつ} だつ/じゃつ/やつ た。
- b. タイプ2: 走ら (な) ン だ ず だ ず。
- c. タイプ3: 走ら ン {かつ} だつ/じゃつ/やつ た だ ず。
走らん {かつ} だつ/じゃつ/やつ た だ ず。

このうち(4)の例を用いて指摘した通時的バリエーションに対応するタイプ1に属する表現は「走りまへんかった」であり、それ以外の表現は文(節)末に「です」を伴うタイプ3である。この文末のみに丁寧語を配置するというタイプ3のパターンは、(i) 標準語に生じつつある言語変化(「走りませんでした」から「走らな ン だ ず」への変化やイ形容詞に「です」が付くようになった変化; 川口 2014; Yamada 2019a, 2023; 山田 2023) と、(ii) 通言語的に観察される丁寧語の表出位置の傾向 (Yamada 2019b, to appear; 例えば、下記の韓国語とタイ語のデータを参照されたい; Portner et al. 2019:3; Iwasaki and Ingkaphirom 2005:207) と、はっきりと一致している。

- (10) *Ecey pi-ka o-ass-supnita.*
 yesterday rain-NOM come-PST-DECL.AH
 ‘It rained yesterday.’ (韓国語)
- (11) *lian êe lɔy lǎ khráp.*
 study problematic PP Q AH.M
 ‘She studies so badly?’ (タイ語)

聞き手に関する表現が文の周辺部にエンコードされるという観察は、Ross (1970) の行為遂行仮説 (Haegeman and Hill 2013; Miyagawa 2012, 2017, 2022; Yamada 2019b, 2023) や、国語学／日本語学における表現系のモダリティ／発話伝達のモダリティ (益岡 1991; 仁田 2013)、あるいは、文法化・間主観化 (Traugott 1995, 2012) などの観点から論じられてきた通時的、通言語学的な傾向とも一致する。冒頭で、通言語学的一般化からの逸脱した日本語の特異性として“二重化”を指摘したが、一見、類型論的に例外的に見えた日本語の内部の方言に、むしろ言語系統を異にする他の言語と類似した分布傾向が見られたというこの事実は、丁寧語が持つ強い文末指向性と、標準日本語の特殊性をより強く印象付ける結果をもたらしたということになる。

6. 結論と今後の展望

本研究では、「方言における非二重化否定過去丁寧形にはどのような使用傾向があるのか」という設問に対して、「走らなかったです (全国規模)」「走らんかったです (全国規模)」「走りまへんかった (近畿地方中心)」「走らんやっただです (九州地方中心)」が複数の都道府県にまたがって使用されている、という結論を導いた。その結果、標準語の通時的变化、および、通言語的な言語間変異の傾向と類似して、文 (節) 末に丁寧語が発音される傾向が見られるという点から、日本語という個別言語内におけるバリエーションと、個別言語間のバリエーションが類似した変異のパターンを示すことは、個別言語を越えた一般性が存在する可能性を指摘した。

最後に、本調査の限界として将来の研究で深められるべき点を挙げる。第一に、クラウドソーシングによる調査は、回答者が日常的にクラウドソーシングでのタスクに馴染みがある母語話者に限定されている点が問題となる。第二に、同一都道府県内のばらつきや、年齢層による違いなどにも焦点を当てたより詳細な研究も今後必要となってくるであろう。

参考文献

- Haegeman, L., and V. Hill. 2013. The syntacticization of discourse. In *Syntax and its limits*, ed. R. R. Folli, C. Sevdali, and R. Truswell, 370–390. Oxford: Oxford University Press.
- Iwasaki, S., and P. Ingkaphirom. 2005. A reference grammar of Thai. Cambridge:

- Cambridge University Press.
- Kaur, G., and A. Yamada. 2022. Honorific (mis)matches in allocutive languages with a focus on Japanese. *Glossa: a journal of general linguistics* 7:1–38.
- 川口良 2014. 『丁寧体否定形のバリエーションに関する研究』くろしお出版.
- 益岡隆志 1991. 『モダリティの文法』くろしお出版.
- Miyagawa, S. 2012. Agreements that occur mainly in the main clause. In *Main clause phenomena: new horizons*, ed. L. Aelbrecht, L. Haegeman, and R. Nye, 79–112. Amsterdam: John Benjamins.
- Miyagawa, S. 2017. *Agreement beyond phi*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Miyagawa, S. 2022. *Syntax in the tree-tops*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 仁田義雄 2013. 「モダリティ的表現をめぐって」『世界に向けた日本語研究』135–162. 開拓社.
- Portner, P., M. Pak, and R. Zanuttini. 2019. *The speaker-addressee relation at the syntax-semantics interface*. *Language* 95:1–36.
- Ross, J. R. 1970. On declarative sentences. In *Readings in English transformational grammar*, ed. R. A. Jacobs and P. S. Rosenbaum, 222–272. Waltham, Mass.: Xerox College Publishing.
- Traugott, E. C. 1995. Subjectification in grammaticalization. In *Subjectivity and subjectivisation: Linguistic perspectives*, 31–54. Cambridge: Cambridge University Press.
- Traugott, E. C. 2012. Intersubjectification and clause periphery. *English Text Construction* 5:7–28.
- Yamada, A. 2019a. A quantitative approach to addressee-honorific markers: identification of crucial independent variables and prototypes. 『計量国語学 32』, 117–132.
- Yamada, A. 2019b. *The syntax, semantics and pragmatics of Japanese addressee-honorific markers*. Doctoral Dissertation, Georgetown University, Washington DC.
- Yamada, A. 2023. Looking for default vocabulary insertion rules: Diachronic morphosyntax of the Japanese addressee-honorification system. *Glossa: a journal of general linguistics* 8:1–47.
- Yamada, A. to appear. Honorificity. In *The Wiley Blackwell Companion to Morphology*.
- 山田彬堯 2023. 「『です』の分類：elsewhere form としての丁寧語」『言語文化共同研究プロジェクト 2022：自然言語への理論的アプローチ』, 59–68. 大阪大学大学院人文学研究科言語文化学専攻.